淑徳大学
SHUKUTOKU

アーカイブズ・ニュース

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

VOL.15
2017.06.30

CONTENTS

■ 東京感化院創設者・高瀬真卿の書斎「春秋堂」…… 1
■ 学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち　V …… 2
■ 全国大学史資料協議会東日本部会2017年度総会　淑徳大学千葉キャンパスで開催 …… 6
■「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内 …… 6
■『高瀬真卿日記　六』（淑徳大学アーカイブズ叢書６）刊行のお知らせ …… 7
■ 淑徳大学アーカイブズ日誌（2017年２月～５月）…… 7

― 東京感化院創設者・高瀬真卿の書斎「春秋堂」―

明治45年（1912）に完成した書斎「春秋堂」は、もともと東京感化院の院児の集会用に建てられた「澗泉亭」を書斎用に解体移築したもので、真卿が所蔵する刀剣を保管しておく場所でもあった。日記よれば、この年６月１日に春秋堂の落成披露会が開かれ、前田利為侯爵をはじめ24、5人が集まり、刀の切り試しなどが行われている。なお、春秋堂には表札とともに写真にある「不迎不送」の看板も掲げられていたと推測される。（淑徳大学アーカイブズ所蔵）

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち Ⅴ

― 松島正儀と「三火会」の有志から ―

淑徳大学アーカイブズ　所長
長谷川　匡俊

今回は民間社会事業家として、戦前・戦後を通じて交流があった人物の中から、長谷川より一回り以上年下ではあるが、戦後いち早く戦災孤児の養護に取り組むことになる長谷川にとって関係の深い、この事業の先輩格であった東京育成園の松島正儀を中心に、その仲間たち（戦前期の「三火会」有志）をとりあげてみよう。

ちなみに、1989年12月発刊の『月刊福祉』（創刊80周年記念特大号[特集]）は「私と昭和の社会福祉」と題して、10氏のインタビュー記事を載せているが、質問項目に「戦前または戦時中までの社会福祉に関して、とくに印象に残る出来事、あるいは人物について、お聞かせ下さい」というのがある。そのなかで、ここでとりあげる松島と磯村の二人は、印象に残る人物として、長谷川良信の名をあげているのである。

松島　正儀

出典：千葉茂明編集『回想 松島正儀－わが国の児童福祉を育てた生涯－』（相川書房、2010年）

◆ 松島 正儀（1904－1997）

松島は、わが国の児童福祉を育てた代表的な人物として知られるが、ここでは手短かにその生涯を紹介してみよう。2010年に社会福祉法人・東京育成園より『回想 松島正儀―わが国の児童福祉を育てた生涯―』が刊行され、小論も参考にさせていただいた。彼は1904年（明治37）石川県金沢市に生まれ、２年後には母と東京に移る。６歳のとき、北川波津が創設した東京育成園に預けられ、８歳で幼児洗礼を受ける。青山学院中学部から明治大学経済学科専門部に進み、28年（昭和３）卒業すると、同年に協調会社会政策学院特別研究科に入学し、32年修了。この間、28年に東京育成園主事、31年東京府方面委員（～74）、翌年園長代理を務め、38年北川波津の死にともない理事長・園長となる（園長は73年まで）。

戦前期の注目点の一つに、28年磯村英一、牧賢一、浅野研真、福山政一等と結成した「三火会」、そして日本社会事業研究会の組織化があり、そこでは社会事業のあり方をめぐって相当激しい議論が展開されたという。松島の戦前・戦後の主要な論文は前掲書に掲載され、遠藤興一の解説があるが、彼の実践とその思想や理論については、遠藤や杉山博昭（「戦前における松島正儀の社会事業論」『純心現代福祉研究』６号、2001所収）らの研究に譲る。戦後は文字通り社会福祉界の先達として多方面で活躍した。東京都児童福祉審議会会長、全国社会福祉協議会養護施設協議会会長、日本キリスト教社会福祉学会会長、日本キリスト教社会事業同盟理事長など要職を歴任した。朝日社会福祉賞（77年）、第３回石井十次賞（94年）、東京都名誉都民（95年）。97年（平成９）４月３日死去、92歳。

さて、松島は長谷川と同様、戦前・戦後を一貫して民間社会事業家の立場を貫いた実践家である。戦時下にあっては、その姿勢（国策との関係等）そのものが厳

しく問われるが、今、一昨年秋に刊行された吉田久一の遺著『日本社会事業小史―社会事業の成立と挫折―』（勁草書房）には、印象深い次のような記述がある。同書の最末尾にあたり、しかも、この後執筆が中断されている。

> 私設社会事業は、建て前では時局に迎合しながら、実態的には在野性を保持した理論的発言も注目される。自由主義というより「在野精神」というべきものである。「国有民営」あるいは私設社会事業奉還論が主張される中で、長谷川良信は「私設社会事業の将来」（『社会福利』第二三巻第三号、一九三九年三月）で公私協調を主張し、さらに「私設社会事業は何処へ行く」（『社会事業研究』第二八巻第一号、一九四〇年一月）で資金難、官公営による侵逼難、官僚による私設経営者の「営業者扱い」からの幻滅難の三難を挙げている。「臣道実職意識」の濃厚な長谷川良信の私設意識からの反抗である。

と評価し、さらに長谷川より若い児童養護施設の経営者・松島の「決戦下収容保護施設への検討」（『厚生事業』第27巻11号、1943.12）の一節を取り上げている。

> 近時収容施設の中、ある種の施設に向って直接第一義的に国家要請に添はざるもの故、それを放擲しても差支ないなどという極論を耳にすることすらあるが、真に噴激の情禁じ得ないものがある。

吉田は、「この種の発言は、他の私設社会事業経営者にもあり、一種の抵抗となっている」と述べているが、その代表として、あえて仏教者の長谷川とクリスチャンの松島の言説を紹介しているところが重要ではないだろうか。吉田はまた、前掲『回想 松島正儀』の「追悼編」に「松島正儀先生を憶う」と題する一文を寄せ、その中でこう述べている。

> 私は大学卒業後三年ばかり長谷川良信先生のもとで現場にいた。長谷川先生は私設（現民間）社会事業を代表する存在で、国民に即した「在野精神」溢れるナショナリストで、三宅雪嶺―渡辺海旭を継愛（受カ）する人である。むろん若い松島先生は大正ヒューマニズムが育くんだクリスチャンで、その思想型は異るが同じ民間社会事業で苦労したことは同じである。それが私を松島先生に近づけた理由の一つと今では思っている。

つぎに、戦後における二人の関係を語るうえで欠かせない、長谷川社会事業の新たな展開について、ごく一部ではあるが触れておこう。48年４月全面施行の「児童福祉法」により、マハヤナ学園に保育所（７月）と乳児院・養護施設（９月）が認可された。当時の『財団法人マハヤナ学園事業概要』には、長谷川の戦後社会事業に寄せる並々ならぬ思いが次のように記されている。

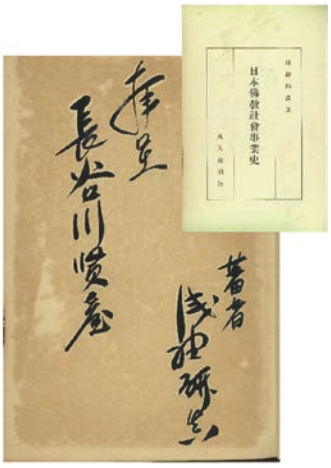
> 終戦後人心の荒廃、世相の堕落があまりに甚だしいので、新しい民主主義の理念の下にセツルメントとして一つの倫理運動を展開しやうとし、最近仏教社会事業連盟等を復興しこれと提携して、地区的全般的社会事業の推進力たらんとし、一方日本再建を次の世代に期待する衷心の祈念とあまりにも悲惨な児童生活に鑑み、30年来努力して来た保育事業を拡大し乳児院及び養護施設を開設するに至ったのである。

その後の長谷川の動向については別著に譲るとして、ここでは彼の没後、松島が民間社会事業の先輩である長谷川を偲んで「良信師を偲ぶ」という一文を『マハヤナ学園70年の歩み―長谷川良信先生生誕100年記念―』（社会福祉法人マハヤナ学園、1991）の巻頭に寄せているので取り上げたい。長谷川の人柄やその思想と実践に対する松島の共感と尊敬の念が伝わってくる。

> 良信師の思想、行動、特に仏者として宗教的基盤に立たれて、教育を築かれ、社会事業を開拓し、実践をされた先生として、敬服の念をささげたい心境です。
>
> 情熱をもった人が歴史を創る、と言われますが、良信先生は正に適中の師、と思われます。過去の社会に於いては、貧困、疾病、児童、老人問題等が実在していても、誰が、いつ、どこで、意図的に取りくむか、一人の人間が他人のために、愛と義と情熱をもって実動した人は全く稀でありました。

さらに「地域」に拡がりをもたらしたことは、良信師の先見性であり、師自信の生涯の方向性を確立されたものと拝察されます。ところが今日、地域と福祉の取りくみは、国、行政の重要政策となり、良信師の構想より70年以上も、ずれておくれている訳であります。

西巣鴨の三福長屋と呼ばれた二百軒長屋に、宗教大学（現大正大学）で学びつつあられたご自分を突っ込み、住民と生活感を共にされました。地区改善と社会事業のニーズを、理論化されつつ、セツルメントを開拓し実践されましたが、この隣保活動からやがて教育実践の分野に偉大なる大乗淑徳学園創立への歩みが築かれたものと拝察します。



浅野が長谷川良信に贈った
『日本佛教社会事業史』
長谷川匡俊氏所蔵

また、長谷川のこうした歩みは、世界的に偉人の一人として記憶されている賀川豊彦との類似性があるとも言及され、「要するに地域に根ざす、隣保事業から良信師は新しいニーズに応え、保育所を新設、さらに乳児、養護施設開設へと発展過程を進まれました。子ども達の親に代り昼夜の別なく育てるという困難な仕事であるために、良信師と、それ以上に、よし子令夫人の御精励は大いなるものが感じられておりました」と、長谷川の妻よし子の存在にもふれている。

このほか、先の児童福祉法に関しては、法案審議の過程で、長谷川が、高島巌、賀川と共に自分（松島）に対して「熱意溢れるお導きを戴いた記憶」があるとし、長谷川は視野を全国に広げ、全国養護施設組織化の必要性を主張して、自ら全養協組織の主要な創立者の役割を担ったという。

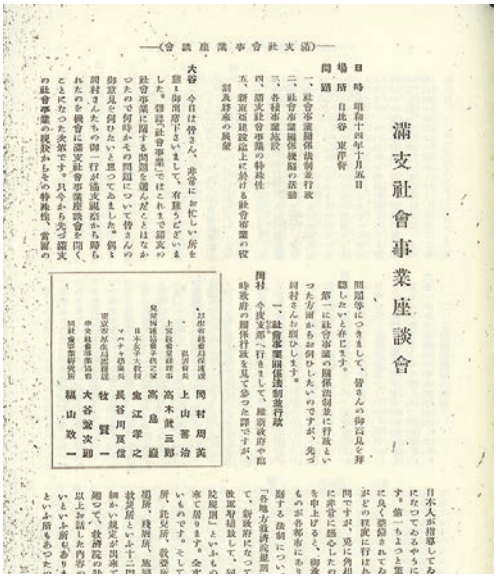
加えて、松島は長谷川とのさまざまな交流の中で、忘れられないこととして、以下のことを記している。

御講演や、主張にはいつも感動を呼ぶ場面が多かったと思います。実体験的で、理論と共に率直な表現が主流をなし、創意に学ぶ面が周囲を満足させていたと憶えます。それに加えて、良信師には天与の授かりものか、師独特な音声の持ち主であり、低音ながら色彩があるかのようで声量は豊か、魅力あるお人であられた記憶が生きつづけています。

つぎに、松島にとっても印象の深い戦前期の「三火会」に結集した何人かについて、長谷川との関わりを紹介してみたい。会のメンバーは、年齢的には長谷川より一世代若い社会事業界の論客たちである。なかでも浅野研真、磯村英一、牧賢一らは、当時、長谷川の思想とは異なるマルクス主義の立場に立つ急先鋒の社会事業論者であったが、いずれも準戦時化が進むなかでマルクス主義から離れ、全体主義的社会事業論に傾いていった。

まず、**浅野研真（1898－1939）**であるが、松島によれば、「三火会」のなかでも際立って論陣を張った人物である。彼は若くして没しているが、真宗大谷派の寺に生れ、フランス社会学を学び、同時にマルクス主義の立場から昭和初期には新興教育運動や反宗教運動にも力を注いだ。浅野の学的態度を貫いていたのは、社会学

磯村　英一
写真提供：東洋大学井上円了研究センター



滿支社會事業座談會

長谷川良信・牧賢一・福山政一
が参加した座談会の記事

出典：『社会事業』第23巻8号（1939年）

徒としての眼と批判的仏教者としての社会的実践的性格であって、それが脚下の日本仏教の歴史に向けられたとき、『日本佛教社会事業史』（1934）に結実したといえよう。仏教社会事業は、長谷川が理論的にも実践的にも生涯かけて取り組んだライフワークというべきで、二人の間の交流はごく自然であったと思われる。私は学生時代、長谷川の書棚に黒のハードカバーに白背文字の浅野の前掲書が目にとまったのを覚えている。表紙を開くと左側に、太い墨書で「拝呈　長谷川賢臺　著者 浅野研真」と揮毫されていた。なお近年、浅野の個人誌『佛陀』（1933.9～39.6）の復刻版が三人社から刊行されており、言説の変化が読み取れる。

磯村英一（1903－1997）は、一般に都市社会学者として知られ、戦後は東京都庁退職後、東京都立大学教授、東洋大学学長等を歴任し、人権運動家としても知られる。長谷川との関わりでは、旧制芝中学における長谷川の後輩に当たり、渡辺海旭は共通の恩師である。磯村には昭和初期の東京市社会局による「浮浪者」調査をはじめ、青年期から都市下層社会への関心が高く、長谷川のスラムにおけるセツルメントの実践（マハヤナ学園事業）と響き合うものがあって、行政の立場からもマハヤナとの行き来があった。本稿冒頭のインタビュー記事で磯村は、賀川豊彦、草間八十雄とともに、「もうひとり、長谷川良信。浄土宗僧侶。仏教系セツルメント「マハヤナ学園」を創設する。その社会事業界における実践的影響は大きい」と述べている。長谷川の没後ではあるが、磯村の強い意向もあって、淑徳大学での講演が実現し、その昔の長谷川の事業や交流の一端に話が及んだものである。

牧賢一（1904－1976）は、東京外国語学校中退後、セツルメント西窓学園に就職し主事となり、「無産階級文化とセツルメント」（『社会事業研究』19巻１号、32.1）等のセツルメント論がある。35年には中央社会事業協会に転じ、戦後は全国社会福祉協議会初代事務局長、関東学院大学教授を務めた。長谷川との接点は戦前期セツルメント活動以来の地域福祉や地域組織化の実践と理論を通してであろうが、未調査のため具体的なことは今後に譲りたい。ただ、淑徳大学開学２年目の８月、長谷川は死去するが、その後に牧は縁あって淑徳大学でコミュニティ・オーガニゼーションを講じている。

最後に**福山政一（1897－1976）**は、わが国のケースワーク草創期における代表的な理論家であり、M.リッチモンドの優れた紹介者としても知られる。戦前期には上記三人とは対極にあって、いわば論敵ということになる。吉田久一によれば、福山は社会正義や人類愛に基づく社会連帯思想をもって、唯物弁証法的社会事業陣営に論争を挑み、とくにマルクス主義者として節を曲げなかった川上貫一との論争が注目される（『新・日本社会事業の歴史』勁草書房、2004）。三火会では先の三人とも火花をちらした。戦後は愛知県豊川市の市長を８年ほど務め、その後縁あって長谷川が学長を務める淑徳短期大学に迎えられ、65年淑徳大学の開学と共に教授に就任し長谷川を助けた。長谷川の没後、その信頼に応えて第二代社会福祉学部長（初代は学長が兼務）を務め、建学の精神の継承に尽瘁したことは本学の歴史に残る。

淑徳大学での福山ゼミの様子

淑徳大学アーカイブズ所蔵

全国大学史資料協議会東日本部会2017年度総会
淑徳大学千葉キャンパスで開催

2017年６月８日、全国大学史資料協議会（略称：大史協）東日本部会の2017年度総会が淑徳大学千葉キャンパス２号館302教室で開催されました。大史協は、大学史の編纂と資料保存について研究する諸大学の連絡協議会として昭和61年（1986）以降活動を始め、平成８年（1996）に正式に「全国大学史資料協議会」として発足、東日本部会と西日本部会の２つの部会に分かれて活発な活動を行っています。

当日はあいにくの雨模様でしたが51名の参加を得、なかには富山県や愛知県からの参加もありました。総会は午後２時から始まり、大史協の会長校である神奈川大学の池原治氏と会場校を代表して淑徳大学アーカイブズ所長で大乗淑徳学園理事長長谷川匡俊氏の挨拶の後、2016年度事業・決算報告、2017年度事業計画・予算案に続いて来年創立30周年を迎えるにあたっての記念事業について審議が行われました。

総会終了後、淑徳大学自校教育研究会が自校教育用として製作した動画「淑徳大学学祖・長谷川良信の生涯」と「淑徳大学50年のあゆみ」を上映し、その後の見学会では大巌寺宝物殿と淑水記念館の大学アーカイブズ倉庫、学祖展、吉田久一展、それに４月28日に終了した特別展「知的障がい児福祉の先駆け―踏むな育てよ 水そゝげ：久保寺保久と八幡学園―」を見学しました。午後４時45分からは11号館１階の学生食堂で情報交換会が開かれ、磯岡哲也淑徳大学学長にもご挨拶をいただき、長谷川理事長も加わって懇談が行われ、和やかなうちに予定通り午後６時15分に無事散会しました。

「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内

― 参加者を募集しています ―

淑淑徳大学アーカイブズでは、地元の方々との交流を深めるため、「古文書に親しむ会」を開催しています。内容は、当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうというものです。

会は毎月第２・第４金曜日の午前10時から２時間ほど、淑水記念館で開催しています。どなたでも参加できますし、その日の都合に合わせて途中から参加いただくこともできます。初心者の方も大歓迎ですので、くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方はぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

『高瀬真卿日記　六』（淑徳大学アーカイブズ叢書6）刊行のお知らせ

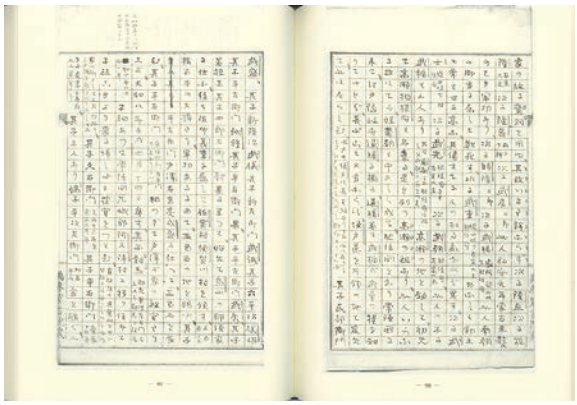
淑徳大学アーカイブズ叢書６として、本年３月に『高瀬真卿日記　六』を刊行しました。本巻は『高瀬真卿日記　五』に引き続き大正11年（1922）４月から、高瀬が亡くなる直前の大正13年11月３日までの日記を収録しています（高瀬は11月17日に死去）。

本巻をもって『高瀬真卿日記』は全28冊の翻刻を完結することとなりました。このため、本巻には編集者である長沼友兄氏が「『高瀬真卿日記』とその周辺」を執筆し、高瀬真卿の日記の全体像について解説するとともに、日記に登場する人物の紹介もしています。また、高瀬が明治26年（1893）ごろに執筆したと思われる高瀬家の歴史や高瀬自身の半生をまとめた「ゆく影の記」の原本写真とその翻刻を両方掲載し、また高瀬が監獄教誨活動を始めた明治17年（1884）から翌年にかけての記録「教誨録事」も収録しています。

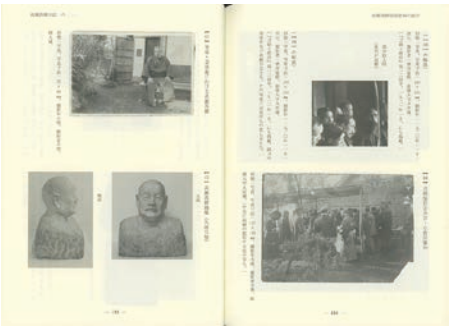
当アーカイブズが所蔵する高瀬関係の資料には、これらの日記や文献資料のほかに多くの写真や実物資料がありますが、これらについては淑徳大学長谷川仏教文化研究所専任研究員の古宇田亮修氏が「高瀬真卿関係資料の紹介」としてまとめています。

以上、本巻は日記以外にも関連する資料や解説を収録しており、『高瀬真卿日記』の最終巻にふさわしい内容となっています。

発行日	2017年３月20日
価格	本体3,000円＋消費税
取扱い	株式会社ディーエスサービス 〒174-8645 東京都板橋区前野町５－５－２ 大乗淑徳学園法人本部ビル内 TEL　03（5392）0081
問合せ	淑徳大学アーカイブズ TEL　043（265）7526



「ゆく影の記」



淑徳大学アーカイブズ日誌（2017年2月～5月）

2月 6日	八幡学園の久保寺玲園長・東洋大学の高野聡子准教授特別展見学。
2月 8日	2016年度第10回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
2月20日	『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第14号発行。
2月21日	卒業生の岩田恵子氏より大学関係の資料寄贈。
3月 1日	2016年度第２回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部）
3月 3日	福田会育児院史研究会による福田会の資料整理参加。
3月 9日	第104回全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加（於東京大学柏キャンパス）。
3月10日	第112回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
3月13日	学園の文書管理に関する打合せ（於学園本部）。
3月20日	淑徳大学アーカイブズ叢書６『高瀬真卿日記　六』刊行。
3月31日	職員栗盛牧子氏退職。

3月31日	職員小笠原玲子氏異動。
4月 1日	専門員大嶌聖子氏着任。
4月12日	2017年度第1回淑徳大学自校教育研究会出席（於東京キャンパス）。
4月13日	毎日新聞社千葉支局の記者特別展の取材のため来室。
4月14日	第113回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
4月19日	毎日新聞千葉版に特別展の記事掲載。
4月21日	2017年度第1回福田会育児院史研究会出席（於福田会広尾フレンズ）。
4月22日～23日	日本アーカイブズ学会参加（於学習院大学）。
4月28日	第114回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
4月28日	淑徳大学アーカイブズ平成28年度特別展「知的障がい児福祉の先駆け―踏むな　育てよ　水そゝげ：久保寺保久と八幡学園―」終了。
5月 8日	学習院アーカイブズ視察。
5月 8日	学祖コーナー増設のために埼玉キャンパス視察。
5月11日	学園の文書管理に関する打ち合わせ。
5月12日	第115回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
5月13日～14日	社会事業史学会第45回大会参加（於長野大学）。
5月16日	法政大学通信教育部学生田中歌子氏吉田久一文庫閲覧。
5月17日	「教員対象学校説明会」参加教員学祖展見学。
5月18日	地方史研究協議会研究例会参加（於日本大学商学部）。
5月22日	学園の文書管理に関する打ち合わせ。
5月22日	学祖コーナー増設のために埼玉キャンパス視察。
5月26日	第116回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
5月27日	千葉・関東地域社会福祉史研究会2017年度第1回運営委員会開催（於ルノアール巣鴨駅前店）。
5月31日	2017年度第2回淑徳大学自校教育研究会出席（於アット・ビジネス・センター池袋別館）。
5月31日	総合福祉学部江津和也准教授と学生16名アーカイブズの展示見学。
5月31日	総合福祉学部川眞田喜代子教授と学生12名アーカイブズの展示見学。

淑徳大学アーカイブズでは、大学及び大乗淑徳学園に関係する資料を広く収集しています。

❶ 大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
❷ 学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記章・各種書類等。
❸ 学生時代に使用していたもの。
❹ 大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。
また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。

SHUKUTOKU
淑徳大学
アーカイブズ・ニュース　第15号
NEWSLETTER of
SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発　行　日：2017年（平成29）6月30日
編集・発行：淑徳大学アーカイブズ
〒260-8701　千葉県千葉市中央区大巌寺町200
TEL 043-265-7526（直通）
e-mail：archives@soc.shukutoku.ac.jp